
幸せ

ラム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せ

【Nコード】

N2160L

【作者名】

ラム

【あらすじ】

ハヤテとヒナギクの恋愛ものです

第1章【生徒会長と三千院の執事の、一つの思い出】

第1章【生徒会長と三千院の執事の、一つの思い出】

第1話【ドキドキ×ハラハラ×告白】

今は、10月1日の夕方

ハ「（僕は、ヒナギクさんの事が好きなのかな？？）」

マ「どうしたんです？ハヤテ君」

掃除をしていたマリアがハヤテの顔の異変に気付き話しかけてきたのだ

ハヤテは、悩んだ末に話した

ハ「実は・・・僕ヒナギクさんを見ていたり喋っているとドキドキするんですよ」

マ「それは、好きと言う事なのでわ？」

ハ「やはりそうですよね」

ハ「僕・・・好きという感情がよく判らないんですよ」

マ「好きと言うのはですね・・・」

マ「ヒナギクさんが違う男の子と喋っていたら何か嫉妬しませんか？

ハ「うん 少しするかもしれませんが」

マ「それが、好き と言う感情です」

ハ「そうかも知れませんか」

マ「多分ハヤテ君は、自分の価値を下げて考えてるんですよ。もっと自分に自信を持って下さい」

ハ「でも執事として恋愛して好いんですか？」

マ「何時執事が恋をしては、ダメと言ったんですか」

ハ「今からお休みをくれますか？」

マ「良いですよ」

ハ「ありがとうございます」

マ「がんばってください」

ハ「当たって砕けてきます」

マ「砕けないように頑張ってください」

ハ「今は、夕方の5時だから生徒会室にいるかな？」

心の中で考え白皇学院に向かった

エレベータを出てヒナギクの居る部屋に向かった

ハ「失礼します!!」

ヒ「どうしたのハヤテ君」

ハ「大事な話があるんですよ!!ちょっと散歩しませんか？」

ヒ「ちょっとならいいわよ(やった)(^o^)/ハヤテ君と散歩
が出来る。でも大事な話ってなんだろう?もしかして告白///
/
」

ハ「大丈夫ですか。顔が赤いですよ」

ヒ「大丈夫よ!」

そして二人は、最初に出会った場所の木の所まで来た

ヒ「それで大事な話って何？」

ハ「それはですね・・・」

ハ「///僕は、ヒナギクさんの事がすっ好きです!つき合っ
てください///」

ヒ「え 今何て…!!!」

ハ「だから綾崎ハヤテは、桂ヒナギクさんの事が大好きです／／／／」

ヒ「私で良いの？ハヤテ君、他に好きな人がいるんじゃない？」

ハ「僕は、ヒナギクさんだから好いんです。それに、他に好きな人なんていませんよ」

ヒ「…．．．よろしくお願いします／／／／」

ヒナギクは、顔を赤くしながら答えた

ハ「え ホントですか／／／／」

ヒナギクの瞳から涙があふれ出した

ハ「ヒナギクさん大丈夫ですか」

ヒ「大丈夫」

ヒ「信じられなくて」

ハ「僕も信じられません！」

ハヤテは、ヒナギクの唇に自分の唇をくっつけた

それは、『キス』という甘く 深くそれでもって優しい物だった

ヒ「ハヤテ君」

ヒナギクはハヤテの胸の中で泣いた

ハ「落ち着きましたか？」

ヒ「もうちょっとこのままでもいいです」

ハ「喜んで (^ ^ | ^ ^ メ)」

ヒ「ハヤテ君知ってる？」

ヒ「ハヤテ君の事好きだったの私だけじゃ無いのよ」

ハ「そうなんですか!!」

ヒ「ナギや愛沢さんや鷺ノ宮さんや歩や泉・・・多分マリアさんも
ハヤテ君の事が好きなのよ」

ハ「そうなんですか!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ヒ「それでも私で良いの？」

ハ「当たり前ですよ！僕は、ヒナギクさんだから好いんです」

ヒ「私、嫉妬深いわよ!!」

ハ「それだけヒナギクさんに愛されているという事です」

ヒ「ありがとう?」

ヒ「私の事呼び捨てで呼んで?／＼／＼」

ハ「でも・・・」

ヒ「良いじゃない」

ヒ「付き合ってるんだから／＼／＼／＼」

ハ「そうですね〜ヒナギク／＼／＼」

ヒ「ハヤテ君／＼／＼／＼」

今度は、ヒナギクからハヤテにキスをした

ヒ「でもヒナギクって呼び捨てにするには、違和感があるわね」

ハ「それなら『ヒナ』って呼んでもいいですか?」

ヒ「うん／＼／＼」

ハ「ヒナも僕の事呼び捨てにしてくださいよ」

ヒ「うん?ハヤテ／＼／＼」

二人がイチャイチャしてる頃三千院のお屋敷では・・・

マ「ナギちよつと良いですか?」

ナ「なんだマリア」

マ「ハヤテ君との出会いの時ナギが勘違いしてるんですよ」

ナ「勘違いだと!!!!」

そしてマリアは、あの時の勘違いをすべて話した

ナ「そうだったのか」

ナ「ハヤテとヒナギクが付き合ったら歓迎せねばな」

マ「そうですね」

ナ「私の恋は、また失恋か」

その後ナギは、マリアの胸の中で泣いた

第1章【生徒会長と三千院の執事の、一つの思い出】（後書き）

初めての、作品なので、間違ってるかもしれませんが……（；；）

第2話【同棲？×初デート？×ビックリ！】

第2話【同棲？×初デート？×ビックリ！】

ハヤテとヒナギクが付き合い始めた日の夕方6時ハヤテに1通の電話が・・・

ハ「どうかしましたかマリアさん」

？「今からナギと帝お爺様のいる本家に行きますので・・・あゝそれとお屋敷は、工事中なのでホテルかどっか1週間程泊まってください」

ハ「泊まるってお金は、どうすれば？」

？「SPの方々が6千万程持って行って貰いますので」

ハ「6千万も要りませんから（・・；）」

？「そうですか。それでは、60万程持って行って貰いますね」

ハ「はい」

そして電話が切れてSPの方々が60万円入った財布をくれた。そして仕事が終わったヒナギクがエレベータから降りて来た

ヒ「その財布どうしたの」

ハ「マリアさんとお嬢様が出かけるので1週間程どっかで泊まるよ
うにとの事らしいです」

ヒ「なら私の家来ない／＼／＼／」

ハ「良いんですか でも1週間もヒナの家泊まる／＼／＼／／／」

ヒ「お母さんに聞いてみないと判らないけどハヤテなら良いと思う
わよ」

そしてヒナギクの家に着いた

ヒ「ただいま」

母「お帰りなさい」

母「あらハヤテ君来てたの」

ハ「お邪魔します」

ヒ「ハヤテを泊めてもいい？」

母「ハヤテ君なら大歓迎よ！」

雪「あらヒナにハヤテ君」

ヒ「お姉ちゃん帰ってたの」

ハ「こんばんわ 桂先生」

母「ハヤテ君泊まるんですって」

雪「あらそうなの あ〜でも私が座敷使うから部屋ヒナのとこしか残ってないわよ」

ハ・ヒ「え！……！！……！！……！！」

母「あら〜なら私と寝ちゃっつ？」

ヒ「良いわよ私の部屋で……………」

ハ「ヒナ？……………」

雪「あらハヤテ君もヒナもお互い呼び捨てなんて付き合っっちゃっるの（^・^・^）」

ハ・ヒ「……………」

雪「お母さん それなら同じ部屋にしないとヒナが泣いちゃっわ」

ヒ「だ〜誰が……」

母「ということではヤテ君はヒナちゃんのお部屋で良いわね？」

ヒ「私の部屋で良い？」

ハ「はい……………」

母「ヒナちゃんお風呂入ってきなさい ご飯の出来てるから」

ヒ「わかった」

雪「私は、お風呂入ったし座敷でお酒飲んでるからご飯の時呼んで」

ハ「わかりました 僕が呼びに行きますよ」

母「ハヤテ君ちょっといいかしら」

ハ「はい」

二人は、椅子に座りヒナママは、真剣な眼差しでハヤテに向ける

母「ハヤテ君、ヒナちゃんのどこが好きになったの？」

ハ「言わないとダメですか？」

母「言わないと、一生ヒナちゃんに会わせないわよ、(´・`・´)」

ハ「そうですか・・・(´・`・´)」

ハ「偽りに聞こえるかもしれませんが、全てですかね？」

ハ「最初見た時は、完全無欠で憧れでした」

ハ「でも、お化けや高い所など苦手な物 カレーやハンバーグなどの男らしい物が好きな食べ物 剣道をしてる時のカツコイイ姿全てが好きなんです」

さつきと変って笑い言った

母「ハヤテ君は、ホントにヒナちゃんの事が好きなのね」

ハ「はい／＼／＼／」

母「将来の事考えてる？」

ハ「将来の事ですか／＼／／」

ハ「ヒナギクさえ良ければ結婚して家庭を築きたいです／＼／／」

母「そう ならこれからもよろしくね」

ちょうど良いところにヒナギクがお風呂から上がって来た

ヒ「お風呂上がったわよ」

母「ハヤテ君も入ってきなさい」

ハ「はい」

母「ヒナちゃん今日の夕飯は、カレーハンバーグよ」

ヒ「やった〜（*^|^*）」

母「ヒナちゃんちょっと良い」

ヒ「良いわよ」

二人は、座りさつきと同じ真剣な眼差しをヒナギクに向ける

母「ハヤテ君のどんな所が好きなの？」

ヒ「言わないとダメかしら？」

母「言わないとヒナちゃん秘密、全部ハヤテ君にはらすわよ」

ヒ「わかったわよ／＼／＼」

ヒ「カツコ付けてるかもしれないけど全部よ」

母「例えばどんな所かしら？」

ヒ「誰にでもやさいくて呼んだら助けてくれて不幸な所もハヤテ君らしいと思うわ」

ヒ「あと／＼／＼私だけに見せてくれる笑顔が一番好き／＼／＼」

母「将来の事考えてる？」

ヒ「／＼／＼ハヤテさえ良ければ結婚したい／＼／＼」

母「ホントにハヤテ君の事好きね」

そう言うと笑いだした

ヒ「何笑ってるのよ」

母「ごめんなわい」

母「でも面白くて」

母「ハヤテ君と同じ事言ってるんだもん」

ヒ「うそ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

そこにハヤテがやって来て3人で夕食を食べた 雪路は、寝ていて起きなかった

夕食を食べ終わり洗い物をハヤテとヒナギクは、洗い物をしていた

ヒ「これ終わったら、私の部屋で勉強しましょうか」

ハ「そうですね」

洗い物も終わりヒナギクの部屋

ハ（ここがヒナの部屋か？ ヒナの香りがする／＼／＼） 心の声

ヒ「始めようか」

ハ「そうですね」

二人とも勉強をして深夜1時

ヒ「そろそろ寝ましょうか」

ハ「僕どこで寝しましょう」

ヒ「／／／／一緒に寝ない？／／／／／」

ハ「でも・・・」

ヒ「良いじゃ無い／／／／／」

ハ「はい／／／／」

そしてハヤテとヒナギクは、ベットに入るもヒナギクはハヤテの腕枕で寝るもハヤテは朝方まで寝れなかったという

ヒ（もう朝か）

ハ「は～はあ おはよう／／／／／」

ヒ「おはよう」

そして下に降りてご飯（ごはん・魚の塩焼き・味噌汁）を食べながら話おした

ヒ「今日、一緒に遊園地に行かない」

ハ「良いですよ」

そして洗い物をして支度をして遊園地への道のりを歩いていた

ハ「ヒナ そのワンピースとても可愛いです／／／」

ヒ「／／／／／（その笑顔反則でしょ～）ありがとう」

遊園地に着いて遊んだ

ヒ「ジェットコースター・観覧車以外は、全部乗ったわね」

ハ「ジェットコースター乗ってみませんか？」

ヒ「ハヤテ知ってるでしょ>(、^、^)<私が高い所苦手なの！」

ハ「でも僕が一緒ですし・・・チャレンジしてみませんか？」

ヒ「乗るから約束して 手を離さないで」

ハ「もちろんですよ！」

そしてジェットコースターに乗ってみたものの1回目は怖かったがそれではまって15回も乗ったらしい

ヒ「ジェットコースター結構楽しいわね」

ハ「ならこれも乗ってみませんか？」

ハヤテの指をさしたのは、観覧車

ヒ「うん 挑戦してみる」

そして観覧車に乗った

ハ「ヒナ 目を開けてくださいよ」

ヒ「私は、良いの」

ヒ「心の目で見てるから」

ヒ「な〜ひゃあ〜ん」

何をしたかと言うとハヤテがヒナギクに抱きつき大人のキスをしたのだ

ヒ「プハーハヤテ何すんのよ／＼／＼／」

ハ「目開けたでしょ」

ヒ「うん でもやり方を考えなさい／＼／＼／」

ヒ「目を開けられたご褒美にもう一回キスして？」

ハ「はい／＼／＼／」

これで幸せな一日になるはずだった。

観覧車から降りた二人は、閉館時間もあり帰っていた道のりで、瀬川泉に会ってしまった！！！！！！！！！！

泉「あ〜あ ハヤ太君とヒナちゃん」

ハ「瀬川さん！！！！」

ヒ「泉！！！！」

この時ハヤテは、早くこの場を去りたかった。何故ならヒナギ

クと付き合ってることが泉に知られれば生徒会三人組に知れて白皇学院全員に知れ渡ってしまうからだ!!

ハ「僕たち、先を急いでいるのでこれで失礼します!」

ハ「行きましょ?ヒナ」

ヒ「うん?」

泉「あれ??? 何かいつもと違う気がするんだけどな... あ
ハヤ太君ヒナちゃんの事呼び捨てにしてる。ヒナちゃんもハヤ
太君の事呼び捨てにしてる...!!」

ハ「//////////」

ヒ「//////////」

泉「それに、二人とも何気に手繋いでる...」

焦って手を解く二人に泉の視線が痛く刺さる

ハ「そんな分けないじゃ無いですか(。・。)(」

ヒ「そうよ(。・。)(」

泉「ホントかな」

ハ「それじゃあ、瀬川さん僕ら用事が有るんで...」

ハ「それじゃ」

泉「まで〜」

ハヤテは、ヒナギクを連れて逃げた。泉も追いかけるが運動神経が良い二人に追いつけるわけもなく見失ってしまう

泉「どうしよう ナギちゃんに聞いてみようかな」

負け犬公園の前まで来た二人

ハ「驚いた〜!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ヒ「あんな所で泉に会うとわね」

ハ「そういえばヒナギクのお母様から夕食の材料を買ってきてと言われましたね」

ヒ「そうね このままスーパーにでも行きましょう」

ハ「今日の夕食何にしましょう?」

ヒ「カレーハンバーグが良い???」

ハ「それは、昨日食べたじゃないですか」

ヒ「ハヤテの作ったカレーハンバーグが食べたいの!」

ハ「また一緒に作ればいいじゃないですか?」

ヒ「そうね／＼／＼／＼」

ハ「今日は、寒いですしお鍋が良いですか？」

ヒ「ええ お鍋にしましょ」

ハ「味は、何にしますか？」

ヒ「カレー味が好い」

ハ「昨日カレーで今日カレー鍋は、無理が在るでしょ」

ヒ「だって・・・>(^、^、)<」

ハ「わかりました。モツ鍋にしてスープハンバーグ風にすれば問題は、ないでしょ」

そして二人は、スーパーに来たのだが此処でまた思わぬ人に出くわした

歩「ハヤテ君？」

ハ「西沢さん!!」

ヒ「歩」

歩「あれ何で二人一緒に手を繋いでスーパーに来てるのかな？」

ヒ「ハヤテ、歩と二人にしてくれない」

ハ「はい！分かりました」

そして近くの負け犬公園のベンチに座ってヒナギクと歩で喋った

ヒ「歩実はね・・・」

歩「ハヤテ君と付き合ってるんですか？」

ヒ「うん 昨日告白された」

歩「良かったじゃないですか」

ヒ「ごめんね」

歩「何で謝るのかな？ ハヤテ君と幸せになって下さいね」

ヒ「うん ありがとう」

そして二人は別れた。

歩「ナギちゃんもハヤテ君達の事知ってるのかな？」

歩「よし ナギちゃんに会いに行こう」

一方ヒナギクの方はというと

ヒ「ハヤテ、私達付き合ってたて良いんだよね」

ハ「どうしたんですか？ 西沢さんと何か合ったんですか？」

ヒ「私達が付き合ってるのを言ったの」

ヒ「とても悲しい顔しててこのまま私達付き合ってた良いのかな
と思ったの（涙）」

ハ「僕がヒナの事が好きだから一緒にいるんです……！」

ハ「堂々としてれば良いんですよ」

ハヤテは、優しくヒナギクの頭を撫でてあげた

ヒ「ありがとう ハヤテ」

第2話「同棲？×初デート？×ビックリ！」（後書き）

間違っていたら、指摘してください

第三話【きもい×うざい×逆恨み】

第三話【きもい×うざい×逆恨み】

明日は、二人が付き合ってから初めての学校なので夜は、早く寝た

月曜の朝二人は、抱き合いながら寝ていた

母「朝よ！ 起きなさい・・・」

ヒナママが部屋に入ってくるが二人が抱き合ってるのを見て言葉が出てこない

母「携帯は、何処かしら・・・」

パーシャ 携帯で写メを撮るヒナママだったが二人が起きてしまった

ヒ「お母さん何で写真なんか撮ってるの？」

ハ「おはようございます お母様」

ココでようやく抱き合ってるのを二人は、きずいた

ヒ「////////////////////」

ハ「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ヒ「お母さん今携帯で写真撮ってたわよね>(<^<(<」

母「何の事かしら?」

ハ「それより急がないと学校遅れますよ」

ヒ「お母さん 帰ってきたら絶対携帯見せなさいよ」

ハ「ヒ」いつてきます」

母「行つてらっしゃい」

二人は 約2時間46分48秒早く 学校に着いた 理由は、生徒会の仕事をヒナギクがしてハヤテが手伝うためである

ハ「ヒナ!この書類こつちで良い?」

ヒ「そこで良いよ」

そして三十分位過ぎてやっと仕事が終わった

ヒ「ハヤテありがとう。今紅茶入れるね?」

ヒナギクは、椅子から立とうとしたが足がもつれてこけてしまった

ヒ「きゃ~~~~~」

／／／／／／／

ハ「ヒナがキスするか・・・（-|-）zzz」

ハヤテは、ヒナギクに抱きついたまま寝てしまった

ヒ「ちょっとハヤテ 寝ちゃったの？」

ハヤテは、夜ヒナギクが横にいてほとんど寝れなかったのだ。

そしてハヤテは、抱きついたまま寝てしまったまヒナギクは動けないのだ

ヒ「（ハヤテの寝顔可愛い）／／／／／／（まだ学校が始まるまで一時間は有るだろうからこのまま寝かしといてあげよう）」

ヒ「私もこの状態じゃ何も出来ないし寝ちゃおう？」

そして二人は、寝てしまった。そこに生徒会三人組の理沙がこっそり仕掛けて有ったカメラを回収に来たのだ

理「カメラ？カメラ？と・・・」

理「ハヤ太君にヒナここで何してるんだ？」

寝ていた二人は起きた

ハ「あれ僕寝ちゃったんだ」

ヒ「おはようハヤテ？（何でここに理沙がいるのよ）（^）（<）

」

理「二人とも寝ていたのか！ 何で抱き合って寝ているか説明してもらおうか」

理沙の悪魔のような笑顔がハヤテ・ヒナギクに向けられた

ハ「あのですね。ヒナが倒れそうになっていたので僕がクッション代わりになつたんですけど、そのまま寝てしまったようです」

ヒ「そうよ ただこけただけよ」

理「ほうくたまたまこけただけで、名前を呼び捨てにする仲間になつたど？」

ヒ「それは、ハヤテ君と私は、付き合ってるからよ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!」

ハ「ヒナ!!!!!!そんな堂々と言わなくてもノノノノノノノ」

理「幸せになれよ」

ヒ「理沙?!!!!!!!!!!!!!!」

理「大親友が彼氏とイチャついてるとこに邪魔は、しないさ!」

ヒ「ありがとう」

ハ「ありがとうございます」

そして三人は、教室に向かった。その間ずっとヒナギクとハヤ

テが腕を絡まし合ってるのは言つまでもない

ハ「何か視線が痛いような（苦笑い）」

ヒ「気のせいじゃないの」

理「ヒナ、白皇のアイドルだからな。そんなイチャイチャしてると
ハヤ太君が襲われるぞ

ハ・ヒ「イチャイチャ何かしてないわよ「してないですよ」」

理「（。 - 。）ハア」（二人のイチャイチャとわ何処からがイチャ
イチャなのか心配になる）」

そして教室に着いた。ハヤテとヒナギクは、席が隣なのである

ハ「ごめん！ヒナ参考書借りっ放しだったようです」

ヒ「良いのよ別に　でも私の家に置いて在る参考書のほうが解りや
すかつたんじゃない？」

ハ「いえ。そんな事は、どっちも解りやすかつたですよ（笑顔）」

ヒ「（その笑顔反則／／／／／／／／）そっいえば今夜の夕食のお
かずどうするの？」

ハ「久しぶりに、ヒナの手料理が食べたいです／／／／／／／／／／／
／」

普通の声で喋っていたため他の生徒に聞こえていた

もはやハヤテの口調が変わっていた。そこでハヤテは、気を失った

ヒ「ハヤテ！ハヤテ！」

東「ざまあみろ！借金があるのに僕の桂さんに手を出したのが悪いんだからな」

ドカーン。にぶい音が鳴り響く！。ヒナギクの木刀が東宮康太郎の顔面を掛けて飛んできた

ヒ「許さない！借金があるから何よ！私は、貴方の者じゃ無い！もしハヤテに何かあつたら私が貴方を殺すわよ！」

東「そ　そんな（涙）」

ヒ「ワタル君！ハヤテを保健室に運ぶの手伝って」

ワ「おう」

傷口は深く危険だったが、さすがハヤテ！。見る見るうちに治っていった。十時間後目を覚ました

ハ「痛たたた！ここは、保健室？」

ワ「やっと起きたか！」

ハ「ワタル君が僕を保健室に？　そついえば事業は？」

ワ「とつくの昔に終わってる。今は、夕方の6時だぞ」

ハ「ヒナは、？」

ワ「先生に事情を聞かれてる」

ハ「そうですか ヒナに怪我は？」

ヒ「今ぐらい自分の事心配しなさい！」

涙目で抱きついてくるヒナギク

ハ「ヒナ、そんなに強く抱きしめられたら痛いですよ（<―>）」

ヒ「我慢しなさい」

二人は、挨拶のようにキスをする。それは、最初と同じ深く・優しいものだった。それを見ていたワタルは、出て行ってしまった

ヒ「ホントに心配したんだから（涙）」

ハ「ありがとうございます」

ヒ「それと生徒会長を守ってくれたからってハヤテは、副会長になつたわよ？」

ハ「ホントですか！」

ヒ「これですっと一緒にね／＼／＼／＼／＼／」

ハ「／／／／／はい！！！！！！！！」

また抱き合っけてキスをする二人

雪「ヒナ・ハヤテ君どこでもイチャイチャするのは、止めたほうが
いいと思っつわよ」

ハ「桂先生／／／／／」

ヒ「お姉ちゃん／／／／／」

第4話【進展×ラブラブ×我慢】

第4話【進展×ラブラブ×我慢】

4日目の朝

母「ヒナちゃん・ハヤテ君今日私用事が出来てお昼から居ないけど夕ごはんを作って食べて先に寝ててちょうだい」

ハ・ヒ「夜は、二人だけ／／／／／／／／／／／／」

母「大丈夫？二人とも顔が赤いわよ（*^|^*）」

ヒ「大丈夫よ」

ハ「大丈夫です」

母「夜中の1時30分には、帰るけど貴方達は、それまでに、寝てるでしょ？」

ヒ「ええ 私達、明日も、学校だから12時までには、寝ると思うわ」

ハ「では、学校に行ってまいります」

ハ・ヒ「行ってきます」

ハ「確かに大分前に言われた覚えもありますけどその事ですかね」
ヒ「へえ〜大分前から付き合ってたのに・・・私とは、遊びだったの(怒)」

ハ「誤解です!!」

ハ「大体、伊澄さんからののは、女性としては無く友達としてっと思っていたので(+o+)」

ヒ「ホントに？神に誓って言える？」

ハ「はい！」

ヒ「じゃ〜信じてあげるわ」

ハ「僕が愛してるのは、ヒナだけですよ？」

ぎゅ〜 チュ〜

ハヤテが後ろから抱きついてキスをした

ハ「信じて下さい」

ヒ「分ったわよ／＼／＼／」

雪「ゴッホン！」

雪「やっぱりイチャついてるわね」

るしヒナとの結婚も夢じゃない！)

ヒ「すごいわね(これで借金が無くなってハヤテ君がいいなら結婚出来る／／／)

雪「それじゃ〜頑張つてね(@^_^)/」

泉「じゃあね〜」

ヒ「私達も帰りましょうか」

ハ「はい！」

ヒ「今日の夕食は、私とハヤテで作ろうね？」

ハ「分かりました」

夕食を二人で作り今は、勉強をしている。そう勉強してる間は、大丈夫なのだ。集中力が無くなると理性が制御できなくなる。それが『人間』勉強が終わりこのままでは、危ないと思つたヒナギクは・

ヒ「お風呂入ってくる」

ヒ「きゃ〜」

ハ「ヒナ！！」

長い間正座をしていたためこけてしまう。支えようとしたハヤテもこけてしまう。ヒナギクがハヤテを押し倒した感じになってし

まった。とても長い沈黙。しゃべり出したのは、ヒナギクだった

ヒ「ねえハヤテ」

ハ「・・・・・・・・」

これで喋ると何かが崩れそうと思ったハヤテは、沈黙を通す

ヒ「私は、ハヤテのすべてが欲しい」

ハ「・・・・・・・・」

ヒ「何か喋ってよ ハヤテ！」

ハ「だめだよ ヒナ」

ヒ「何で？ハヤテは、私が欲しくないの」

ハ「欲しい 押し倒したい位欲しい！愛したい！でもダメなんだ」

ヒ「何で!?!」

ハ「結婚しよう！来年の僕の誕生日に結婚しよう」

ヒ「うん結婚しよう／＼／＼／＼」

抱き合う二人

ヒ「でも今は、我慢できないよ？」

母「見ては居ないけど上から聞こえてきたのよ（*^|^*）」

ハ・ヒ「////////////////////」

母「避妊して無いわよね？孫の顔楽しみね〜」

ヒ「孫・・・・////////////////」

ハ「このことは、誰にも・・・」

母「雪路さんとマリアさん以外は、知らないわよ（^・^）」

ハ「マリアさん////////////////」

ヒ「お姉ちゃんに何でマリアさんにも？////////////////」

母「ハヤテ君が家に来る前に電話があつて・・・」

？「告白が成功すればそちらに泊まる事になると思うのでよろしく
お願いします。それと何か面白い事があればメールして頂けるとあ
りがたいのですが・・・」

母「と言う電話があつたからつい・・・」

ヒ「つい じゃない！。恥ずかしいじゃない！////////////////」

ハ「とりあえず下着のままだと風邪引きますのでお風呂に行きまし
ようか！」

ヒ「私は、しないわよ!」

ハ「僕もしませんよ!」

雪「ホントかしら? だって生徒会室でキスして抱き合ってたって聞いたわよ」

ヒ「そんなの イチャイチャ に入らないわよ」

雪「イチャつくとは、男女がなれなれしくたわむれ合う事 by 良い子の辞書にこう書いてあるけどヒナとハヤテ君は、なれなれしく手を繋いだりキスしたりしてるじゃない」

ヒ「な何よ・・・別に良いじゃないノノノノノ」

ハ「お話し中悪いのですが早く寝ないともう深夜4時ですよ!」

ヒ「それもそうね。早く寝なきゃ〜行きましょハヤテ」

ハ「はい」

雪「でもハヤテ君とヒナが結婚したらハヤテ君と義理の兄弟じゃない」

母「結婚する前に孫に会えるかも知れないわね!」

第5話【優勝？×ラブラブ×5億？】

第5話【優勝？×ラブラブ×5億？】

桂家只今の時間4時10分。ヒナママと雪路が寝に行ったが、ハヤテとヒナギクは、寝なかった！何故かと言うと、生徒会の仕事を、朝までに終わらしてデートに行こうとして入るのである。二人は、今朝ごはんを作っている！

ヒ「ハヤテ君！目玉焼きを作って」

ハ「はい！分かりました」

そして朝ごはんが作れた！

ヒ「ハヤテの作った目玉焼き美味しいわ？」

ハ「ヒナの作った、たこさんウインナー可愛いですよ（*^_^*）
*）コーンスープも美味しいですし」

二人は、洋食の朝ごはん（パン・目玉焼き・ウインナー・コーンスープ）を食べ学校に向かった！ 自転車で二人乗り

普通は、20分掛る距離もハヤテの自転車なら5分で行けた！

そして二人は、生徒会の仕事をした！そして桂家では・・・

母「私は、何時結婚出来るのかしら？」

母「雪路さんは、まず彼氏を見つけなきゃ」（＾o＾）／

その頃、白皇学院では・・・

ヒ「はあ〜」

ハ「ちょっとそこのソファで、仮眠を取っててください」（＾・＾）

ヒ「大丈夫よ！まだいけるわ」

ハ「無理をすると、体に悪いですから！（＾＾）！」

ヒ「でも仕事が！」

ハ「それは、僕が、やって置きますから」

ヒ「でもまだ書類600枚もあるのに」

ハ「一枚、12秒でやれば軽く出来ますから」（＾-＾）

ヒ「一枚、12秒でやるなんて、無理よ！」

ハ「執事に、不可能は、ありません（ー／ー）」

ヒ「でも！・・・」

ハ「ほら少し仮眠を取らないと体に毒ですから」

ハヤテは、ヒナギクをお姫様抱っこをして、ソファに連れてった

ハ「寝るまで側に居ますから」

ヒ「じゃあ30分経ったら起こして!」

ハ「分かりました(^o^)」

そして2時間後!

ハ「起きて?ヒナ!」

ヒ「うんハヤテ?」

バア〜ヒナギクは、時計を見て、慌てて飛び起きた

ヒ「どうして2時間も経ってるの>、へ、<」

ハ「寝てるのを起こすのは、可哀そうだったので、つい<」「>」

ハ「書類も無事に終わりましたし問題は、無いでしょう」

ヒ「問題大ありよ(怒)ハヤテ、一睡もしてないじゃない」

ハ「大丈夫ですよ!慣れてますから」

ヒ「慣れちゃ駄目よ!もしハヤテが過労で倒れたら私・・・(涙)

ハ「すいません。今度からきおつけますね」

ヒ「今は、眠くないの？」

ハ「大丈夫ですよ！」

ヒ「ホントに？>、<、>、<」

ハ「ちょっと眠いです（・ー・）」

ヒ「ハヤテもちょっとは、仮眠をとりなさい」

ハ「つて！（ヒナの、ひざ枕／＼／＼」

ヒ「ほら／＼／＼早く？」

ハ「はい？」

こうして短い間だったが、仮眠をとった。そして 白皇学院公認カップル の結果発表が始まった！

雪「結果発表を始めるわよ！」

雪「そしていよいよ1位・ハヤテ君&ヒナギク！」

雪「それでは、1位のハヤテ君&ヒナペアーには、賞金5億が贈呈されます」

ハ・ヒ「これでハヤテと結婚出来る ヒナと結婚出来る

ハ・ヒ「／＼／＼／＼／＼／」

雪「ほら、赤くなつてないで、早くお金と表彰状取りに来なさい」

ハ「はい！」

ヒ「何で、小切手じゃなくて、重い現金なのよ（怒）」

雪「だって、小切手で、ハヤテ君の、「特性」不幸」で小切手が風にも飛ばされたら大変でしょ！」

ヒ「確かに・・・！」

ハ「そこで納得するんですか！！」

雪「それと、2位からの賞金は、2位・2億5千万円 3位・1億2500万円 4位・5000円 5位・1000円って事で！」

生A「5位と4位は、賞金と言える金額じゃねえ」

そのころハヤテとヒナギクは、もう此処には、居ないが、生徒会三人組が用意したモニターに生徒会室が映っており、そこに、ハヤテとヒナギクが、抱き合つて、大人のキスをしているのが、映し出されている

？「ヒナギクさんのお母さんから、聞きましたか？」

ハ「ええ〜でも、僕的には、執事を続けたいのですが…」

？「でも、借金も返済出来た事ですし、お屋敷で、住み込みで、働かなくても、良いですよ」

ハ「ええ。でも、何で、ヒナと、同棲つと言う事になるんですか？」

？「それは、桂さんの、家のままだと、イチヤイチャ出来ないからですよ。それに、どうせ、結婚するんでしたら、結婚前に、同棲することは、基本ですよ」

ハ「なるほど〜」

？「一緒に、住む家は、ヒナギクさんのお母さんに聞けば分かると思います」

ハ「わかりました」

？「では…」

電話が切れた

母「わかったかしら？」

ハ「一応は…」

母「物件は、これだから」

ヒナママから、地図と書類が、渡される

ヒ「家具とかは、如何すればいいの？」

母「元々、置いて在るらしいけど、まあ行って見れば分かると思
うわ」

ハ「行って見ましょうか」

ヒ「そうね」

その家は、桂亭と同じ位の大きさの5階建てだった

ハ「結構広いですね」

ヒ「家具も、電化製品も揃ってるわ」

ハ「この部屋は、何んだろ？」

ガチャ

ハ「／／／／／／」

ヒ「どうしたの？ハヤテ」

ヒ「／／／／／／ダブルベット」

ハ「此処で、二人一緒に寝るんですよね？」

ヒ「ええ、多分：／／／／／」

ヒ「それじゃ〜自分の、部屋を決めていきましょ」

この家の部屋数は、リビング×1・ベッドルーム×2・和室×2・客間×2・トイレ×3・ハヤテの部屋×2・ヒナギクの部屋×2・客間×4・座敷×1・キッチン×2・ミニ映画館×1・大浴場×1・剣道場×1・屋上×1・地下室×1の計26部屋から成る家で、二人暮らし、するには、十分なかさだった!

ヒ「ハヤテ〜!ハヤテ〜!」

ハ「如何しました?」

ヒ「見て! (。・。・) 剣道場よ?」

ハ「はあ (。・。・) 何か、この家、おかしいですよ?」

ヒ「何で?」

ハ「だって、4階が、道場で5階が、映画館なんて…」

ヒ「それもそうね?」

????「それは、お嬢様の、配慮です」

ハ「クラウドさん!!!!!!」

ヒ「ナギからの?」

ク「道場があつたら、例え喧嘩しても、卓袱台を引つ繰り返して畳

を汚す事はないだろうと…」

ハ「お嬢様らしいですね」

ヒ「余計な、お世話よ!」

ハ「でも、映画館は、何のためでしょ?」

ヒ「また、理沙達と手を組んで、おちよくる為じゃないの」

ク「それは、映画館で、ラブラブされると、迷惑が掛るから、だそうです」

ヒ「どうして、迷惑が、掛るのよ?」

ク「それは、イチャ付くと周りを苛立てさせるそうです」

ハ「それより、クラウドさんは、何所から入って来たんですか?」

ク「地下室からです。地下室は、三千院家・佐野宮と繋がって要るんです」

ハ「そうなんですか(。・。・)」

ク「伝言も終わりましたし、そろそろ帰ります」

ハ・ヒ「さよなら」

ハ「(二人暮らしたなんて、ドキドキするノノノ)」

ヒ「ねえ〜ハヤテ！そろそろ、夕食にしましょ〜？」

ハ「それもそうですね」

ヒ「約束覚えてる〜？」

ハ「今度、僕の、手料理が、食べたいってやつですか？」

ヒ「そう だから、今日は、ハヤテが作って？」

ハ「良いですよ〜（^o^）何が良いですか？」

ヒ「ハンバーグカレー」

ハ「ホントに、好きですね」

ヒ「良いじゃない！美味しいのよ。カレーとハンバーグ」

ハ「はいはい！（^^）！」

ハ「でも、前みたいに、二人で作りませんか？」

ヒ「それもそうね〜」

ヒ「なら、前と逆に、ハヤテは、ハンバーグ作って？私は、カレー作るから」

ハ「はい」

こうして、苛々するほど、仲良く、カレーとハンバーグを作っ

た！

ヒ「やっぱり料理、上手いわね〜！」

ハ「ヒナギクこそ」

こうして、二人で作った、ハンバーグカレーを食べ終え、仲良く、洗い物をしていた

ヒ「ねえ〜ハヤテ？まだ8時だし、道場もあるし、剣道、久し振りにやらない〜？」

ハ「良いですね〜でも、勉強もやらないといけませんから、10時位まで、ですよ」

ヒ「当たり前よ」

こうして、久し振りに、剣道を、やった。勝敗は、三本勝負で、ハヤテ6勝・ヒナギク7勝でヒナギクの勝ちである

ハ「ヒナは、やっぱり強いですね〜」

ヒ「ハヤテこそ、強いじゃない！剣道部に、入らない？」

ハ「考えておきます」

こうして、二人は、お風呂に入り、この日は、終わった。次の日、学校の、教室での事！

泉「おは〜よう」

ハ「おはようございます。瀬川さん」

ヒ「泉！おはよう」

泉「聞いたよ〜（<―>）一緒に、住んでるんだって〜！」

ハ「なぜそれを！／＼／＼」

泉「白皇新聞に、写真付きで、載ってるよ〜」

ハ「白皇新聞？」

ヒ「ああ〜そう言えば、そんな物もあったわね〜」

泉「白皇新聞は、白皇学院の、面白そうな事が、載ってる新聞なんだよ〜」

ヒ「全然面白くないわよ！」

ハ「でも瀬川さん、よく知ってますね」

泉「当たり前だよ！だって、作ってるの、私達だもん〜？」

ハ「ええ????????」

ヒ「だから、白皇新聞を発行しているのは、動画研究部よ」

ハ「そうなんですか！全然知らなかったです」

ヒ「当たり前よ！だって、発行されたのは、7回だけだもん。それに、3回は、ハヤテが、編入する前だし、4回は、ハヤテが載ってる物だしね」

泉「白皇新聞には、ルールがあつて、載ってる人に、教えちゃダメなんだよ」

ハ「何で、僕が、4回も載ってるんですか？」

泉「うーんと、確か：1回目は、『生徒会長に告白！』で、2回目は、『最弱・最低のヘタレから、生徒会長を、守ったスーパヒーロー！』で、3回目が、『白皇公認カップル』で、堂々の1位で、結婚宣言！』で、4回目が、『無敵の生徒会長と同棲！！！！！』だったかな？！？」

ハ「な何で、それを……」

泉「ハヤテ君、顔赤い」

ヒ「ホントに、オツケーしてるのが、理事長じゃなかったら、すぐに、廃止にするのに（怒）」

ハ「それって、盗撮・盗聴してるって事ですよ？（怒）」

泉「うん ナギちゃんに頼んで、家に仕込んで貰って、あとは、私達で取り付けたんだよ」

ハ「ヒナの家にもですか？（……）」

泉「勿論でも個人情報だから、大事な所は、CDにして、売って

無いから大丈夫だよ」

ヒ「CDにした!!!!初耳ねーホントにしてないの(怒)」

泉「ヒナちゃん怖いよ(涙)」

雪「CDも5万枚も売れたわよ」

ヒ「お姉ちゃん、それホント(怒)」

雪「あれ〜ヒナいたの〜!」

泉「大丈夫だよ〜Hの所寸前までだから、個人情報も守られてるよ〜」

ヒ「何処がよ(怒)お姉ちゃん、それどこで、売ってるの!」

雪「暴力は、ダメよ!暴力は、」

ハ「早く答えて下さい!じゃないと、痛い目にありますよ(^^)(怒)」

雪「はい!、購買で1枚1000円で、売ってるわ」

こうして、購買は、破壊されハヤテとヒナギクの迫力に4998万枚返品された

ハ「あんなに、暴れなくても良かったんじゃないですか?」

ヒ「ハヤテこそ、皆に怖がられてたじゃない」

ヒ「それでも後2枚、戻って来て無いのよね」

ハ「誰が持つてるんでしょう？」

ヒ「ホントに、泉達、恥ずかしい事してくれたわ」

ハ「まさか、ホントに売ってるとは、思いませんでしたね」

こうして、ハヤテとヒナギクの1日は、終わったのである！後日知る事になるのだがCDの後2枚は、ヒナママと雪路が、持っていた

最終話【リング×ダブル×永遠に…】

最終話【リング×ダブル×永遠に…】

11月11日の朝・この日は、ハヤテの誕生日である！

ハ「ヒナ！僕と別れて下さい！泉が好きになっちゃったんです」

ヒ「嘘！！！！私、ハヤテから、離れたくない（涙）」

泉「ハヤテ君、今日は、誕生日だね？早く行こう」

ハ「それでは、さよなら。桂さん」

バァー実は、ヒナギクは、夢を、見ていたのである！

ハ「おはようございます！ええ、如何したんですか？」

ヒ「怖い夢見たの（涙）」

ハ「大丈夫ですよ！僕が、近くに居ますから！」

ヒ「うん、ありがとう」

こうして、学校に行つた！もうこの二人は、堂々と、人前でキスをしたり、している。最初は、みんなイライラしていた物の、今や、白皇名物になっていた。そして、今その二人は、生徒会室で、イチャイチャもとい仕事をしている！

ハ「ヒナ！今日、大事な話があるので、あの木の所まで、来てくれますか？」

ヒ「私も、大事な話があるから（大事な話って、あの夢みたいな事ないよね）」

そして、ハヤテバースデーパーティーの後、初めて、あつた木の所まで二人で来た

ハ「ヒナ！今まで、いろんな事が有りましたね」

ヒ「そうね！ハヤテは、何時も、不幸だったけど」

ハ「そんな事、無いですよ。ヒナと一緒に居られるだけで、僕は、幸せです」

ヒ「私も、幸せよ！だから…」

ハ「ヒ、ねえ！大事な話があるの。大事な話が、有るんです！」

ハ「ヒナからどうぞ」

ヒ「ハヤテから」

ハ「僕と、結婚して下さい」

ヒ「ええ？」

ヒナギクは、驚いたような顔をして、目には、涙がたまっていた

ハ「大丈夫ですか？」

ヒ「うん…別れ話かと思ったから」

ハ「もしかして、今日の朝の、夢の事ですか？」

ヒ「うん…私を、捨てて泉の所に行っちゃったの」

ハ「僕が、愛しているのは、ヒナだけですよ」

ヒ「もう一回行ってくれる？」

ハ「はい！僕と、結婚して下さい！」

ハヤテは、言うと同時に、指輪を出した。誕生石の、アクアマリンとトパーズのエンゲージリング

ヒ「勿論！OKよこれからも、よろしくね」

ハ「良かった！断られたら如何しようかと思った」

ヒ「バカーね！断るわけないじゃない」

ヒ「今から、籍入れに行きましょうか」

ハ「今からですか…!!」

ヒ「うん？」

ハ「はい！良いですよ」

こうして、一組のカップルは、ゴールを迎えた！でもこれは、まだ、カップルとしての、ゴールであって、まだ人生のゴールは、遠い！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160/>

幸せ

2010年10月11日09時30分発行